

2016 年が迫っている……

(公社) 日本透析医会

副会長 鈴木正司

現在の形態の血液透析（人工腎臓）の原型の登場は、有名な Kolf の回転ドラム型であり、第二次大戦の末期（1940 年）のことである。ごく初期には前立腺肥大による腎後性腎不全や萎縮腎の患者で試みられたが、ことごとく失敗していた。そして真の治療成功例は 1943 年のサルファ剤による両側尿管結石症、1945 年の急性胆嚢炎に合併した急性腎不全（BUN 400 mg/dl, 11 時間透析で昏睡から覚醒）であった。このことからわかるごとく、腎機能の回復するチャンスがない慢性腎不全では、医療費は当然ながら、当時の技術では血管アクセスの確保が limiting factor であった事を示している。

その後間もなく 1950～57 年の朝鮮戦争では、戦傷による多数の急性腎不全例に対して米軍がこの回転ドラム型人工腎臓を使用し、本国のみならずわが国内の米軍病院でも治療を行い、その成果の一端がわが国の医師にも驚きをもって知られることとなった。

灼熱の朝鮮戦争とその後の冷戦のさ中にあっても、米国では 1955 年には二重コイル型（Kolf）、1960 年には組立式の平板型（Kiil）の透析器が続いて開発されていた。同じ 1960 年には Quiton-Scribner シャント（いわゆる外シャント）も発明され、慢性腎不全に対する繰り返しの人工腎臓治療法がすでに確立されていたことは、今にして思えば驚くべきことである。

このような時期の 1959 年に、エジプトから英国の医科大学に進学した青年（Robin A Eady）が、1962 年には末期腎不全と診断された。しかし、その頃の英国では大学病院といえども血液透析治療をできる病院はなかったという。1962 年（昭和 37 年）とは奇しくも小生が大学医学部に入学した年にあたるが、その時点での英国でもこれが実態であったし、わが国でも同様であった。

かの Eady 青年は米国 Seattle の Dr. Scribner のところで、幸運にも 1963 年に外シャントで血液透析治療を開始することができた。当然ながらシャントの血栓・閉塞は頻回に生じたが、彼は自分で片手で declotting 操作をやったという（Seattle ではそのような自己管理まで指導したようである）。そして 1964 年末には、ようやく血液透析が可能となった英国に戻っている。

彼が英国に戻った 2 年後の 1966 年（昭和 41 年）になって、わが国での先駆的施設でも、例えば新潟の平澤らはコイル型透析器と外シャントを使用して人工腎臓を開始し、1967 年にはキール型透析器の使用を開始している。なお腹膜透析はこれよりも数年早くから開始されている。

さて、その後の Eady 医師は皮膚科医として働き、25 年間の透析を継続し、外シャントから内シャントに移行し、黎明期の訓練を受けた透析ナースと結婚し、家庭を持ち、子供が生まれたが、その間には大量の輸血を受け続けている。そして 1987 年に献腎移植を受けて透析から解放された。大量輸血による抗体産生が、腎臓移植の際の大きな問題であったという。

現在でも免疫抑制治療を継続しつつ元気に生活している。そして本年 6 月の福岡市での日本透析

医学会の第 58 回学術集會に妻の Ann Eady と共に姿を見せて、「腎代替え治療の 50 年：ひとりの腎臓患者の個人的な回想」(Fifty years of renal replacement therapy : personal recollection of a kidney patient) という特別講演を行った。彼がああ時点で Seattle での透析のチャンスが得られなければ、このような感動的な講演を聴くこともなかったであろう。その頃の Seattle では「誰を生かし、誰を死なすか」を決める委員会があったことは有名な事実であったからである。

わが国でも先達の努力の蓄積と現状を考えると、今更ながら我々自身が日夜繰り返している透析治療の「もの凄さ」を実感し、それを支えるわが国の経済力に思いを致した次第である。この「もの凄い」治療であったはずの血液透析療法が、2016 年にはわが国でも 50 年の節目を迎えることになる。しかしながら、この 2016 年を手放しで喜ぶことができないわが国の現状を思うと、複雑な感慨が過ぎるのである。